

巻頭のことば

王朝文学研究は今日百花繚乱の彩りに輝いている。作品論・作家論は言うまでもなく、発掘資料の活用・海外機関所蔵写本研究・比較文化交流を踏まえた研究、周辺学の文化芸能との連関等々、広範な研究が進行している。小生の関わる専修大学人文科学研究所でも、賀茂祭社頭（社頭）の儀を参観したり、京都市埋蔵文化財研究所で紫宸殿の南門の承門跡から発掘された地鎮祭具の「輪法」や「楸（け）」を見せてもらったもいる。王朝文学でもっとも多く描写されている葵祭は平安京地主神に対する祭祀である。また「皇統」の正殿とも言える南殿はその南庭（なだてい）で光源氏が春鶯囀を舞った舞台である。

二〇一三年六月に前記の専修大学人文科学研究所主催で右大臣藤原良相邸（よしみ）発掘に関する公開講演会が企画された。多くの遺物の中で、もっとも注目されたのは平仮名の記された墨書土器である。良相邸「西三条第」は『日本三代実録』において「西京第」そして「百花亭」と記される、華麗さを偲（おぼ）ばせる名邸であり、貞観八年（八六六）に清和天皇も行幸している。ただこの名邸の主良相は良房の弟で応天門の変で伴大納言善男に加担したため、失脚という憂き目に遭い、翌年の貞観九年（八六七）に薨去してしまう。子息常行も貞観十七年（八七五）に死去し、邸宅は衰退してしまう。それ故その遺物である、墨書土器に記された平仮名も貞観年間の九世紀中期ごろに書かれたことになる。平仮名の成立は十世紀とされるが、この大発見が半世紀程遡らせることとなる。平仮名は平安時代の文学に使用された文字であり、文学や書において重要な文字なのである。小生はさらに「かつらきへ」という墨書に注目している。このチームこそ、天皇が皇祖神天照大神・歴代天皇霊・八百万の神々をお慰めする、天皇のみの奉奏する秘曲、御神楽の神送りの部に入る「朝倉」曲の歌詞である。恐らくは前掲した清和天皇の藤原良相邸への行幸に奏上された一曲

ではないかと思われる。

海外との日本の比較文化研究として、二〇一三年度はポerlandへ二度訪問している。ワルシャワや古都クラクフで、日本研究の実情に触れ、シンポジウムにも参加している。専修大学人文科学研究所で企画した西欧文化、中南米文化、アジア文化に関する研究会・講演会・総合研究と称するフィールド・ワークが行なわれている。旧年度の締めとなる公開講演会が二〇一四年三月六日に催された。平安皇朝の国際交流、アジア文化圏との連関を示す軌跡を『源氏物語』の中で把握することを目指した。陣野英則氏のテーマは『うつほ物語』『源氏物語』の中に見える学問、河添房江氏のテーマは『源氏物語』と唐物をめぐる文化史、小生のテーマは「平安皇権と渤海の交流から『源氏物語』へ」というものであった。聴衆も活字化を希望しているので研究所の月報でまとめる予定が立てられている。

こうした状況下で、王朝文学に関する拙稿をまとめつつあった。その間で斎藤達哉氏・原豊二氏を軸に小生周辺の研究者間で論集をまとめるということが同時に進行していた。小生としては現在の厳しい研究者育成事情や出版事情を垣間見ているので、できるだけ若い研究者をサポートしたいという切なる思いもあった。それで小生の論稿と一緒に若い方々の論稿を合冊で上梓することを思い付く。武蔵野書院の前田智彦社長に打診を試みたところ、快諾を戴いた。少々珍しい編著形式で、前篇は拙稿を十一章、後篇は中堅・若手研究者の論稿十三章を掲載することになった。

拙稿は少し大きなテーマでの王朝文学論として平安京地主神賀茂明神や祇園御霊会に関する論稿。珍本専修大学図書館所蔵伝秀吉筆『源氏の物語のおこり』の制作事情、その周辺の人間模様を読み解く論稿。『源氏物語』の時空の風景について究明する論稿。『枕草子』の風景論。能因法師論。『更級日記』論から成っている。

中堅・若手研究者の論稿は作品論に加え、宮内庁書陵部・国文学研究資料館・海外所蔵写本、古注釈、さらに比較文化的研究の周辺学を加味した研究等を踏まえた王朝文学の軌跡を掲載している。小生が学会活動や研究活動、兼任講師の体験の中でお会いした研究者の中から依頼している。むしろこれらの研究者こそ、小生自身に恩恵を与えて

ると言っている。

本書は執筆者の先生方はもちろん、世話人の労を取られた斎藤達哉、原豊二の両氏、そして細々とした労に関わった菅原郁子氏に御礼を申し上げます。またすでに御名前をあげた武蔵野書院前田社長、煩わしい編集作業を遂行して下さった梶原幸恵氏に感謝申し上げます。

二〇一四年三月 杏の花が開き始めた砦の寓居にて

小山利彦

目次

巻頭のことば——小山 利彦 i

前篇 小山利彦論稿選集 1

第一章 平安京地主神、賀茂明神に関わる文学空間 3

一 はじめに 3 二 賀茂明神の聖空間 7 三 賀茂の御生れの構造 10 四 賀茂に関わる空間の留意点 14

第二章 賀茂祭と王朝文学 19

一 はじめに 19 二 王朝文学における賀茂祭 20 三 賀茂祭社頭の儀のこと 29

第三章 祇園御霊会と王朝文学 39

一 はじめに 39 二 王朝期における祇園御霊会の歴史資料 40 三 『年中行事絵巻』の祇園御霊会 42
四 王朝文学に見る祇園御霊会 48

第四章 専修大学図書館所蔵伝秀吉筆『源氏の物語のおこり』試論——太閤秀吉と近衛家—— 57

一 はじめに 57 二 秀吉の動静——『源氏の物語のおこり』書写の時期—— 58 三 慶福院の周辺 66
四 「ちやあ」を探る 71 五 むすびに——大澤本『源氏物語』に触れる—— 79

第五章 延喜・天曆の皇權——『源氏物語』に描かれた風景—— 85

- 一 「いづれの御時」の時代設定 85 二 古めかしい歌舞管弦 88 三 光源氏物語と延喜の風景 92

第六章 角田文衛著「北山の『なにがし寺』」を起点に 99

- 一 はじめに 99 二 角田文衛説の北山「なにがし寺」 100 三 北山「なにがし寺」の諸説 104

第七章 『枕草子』賀茂の郭公試論 107

- 一 はじめに 107 二 『枕草子』に見る郭公に対する意識 108 三 「賀茂へまゐる道に」の章段における「賀茂」 112

第八章 『枕草子』「賀茂へまゐる道に」章段の本文と芸能 121

- 一 「賀茂へまゐる道に」章段における田植え歌 121 二 『枕草子』における「賀茂」の田植え歌——能因本との連関—— 125 三 住吉大社御田植神事の沿革と神事次第 126

第九章 賀茂御祖神社禰宜里亭・河崎泉亭考——『枕草子』の「賀茂の奥」を探る—— 133

- 一 はじめに 133 二 河崎泉亭里亭の位置 134 三 史上に現れた河崎泉亭周辺 141 四 河崎禰宜里邸の人々 145

第十章 能因法師——都から東国へ—— 151

- 一 はじめに 151 二 東国の地を詠んだ歌 153 三 陸奥への旅 155

第十一章 『更級日記』試論——文学風景への意識を軸に—— 163

- 一 風景への意識 163 二 上総国府の周辺 165 三 文学やその風景への憧れ 169 四 風景表現の方法 171 五 『源氏物語』の世界へ 176

後篇 王朝文学の新たな軌跡 181

平安朝和歌の生成と染色・染料——『うつほ物語』の「紫」をめぐる贈答歌を中心として—— 森田 直美 183

- 一 はじめに 183 二 平安朝の貴族と染色 184 三 平安朝和歌と染色・染料——その連関性の深さについて—— 186 四 『うつほ物語』の「紫」をめぐる贈答歌——底流する染色・染料への意識—— 188 五 染色・染料から考える「若紫」の具体像 194 六 結語 195

『落窪物語』における手紙と和歌との考察…………… 園山 千里 199

- 一 はじめに 199 二 手紙と物語——『源氏物語』の研究から—— 200 三 『落窪物語』の手紙 203 四 道頼から女君への手紙——恋文—— 205 五 女君幽閉中とその後の手紙 208 六 おわりに 212

注釈史のなかの『河海抄』——『首書源氏物語』をめぐる——…………… 吉森佳奈子 217

- 一 はじめに 217 二 『首書源氏物語』と『湖月抄』 218 三 『河海抄』と『首書源氏物語』 222

高麗人の観相についてのノート——『花鳥余情』『細流抄』を軸にして……………	原 豊二	231
一 はじめに ²³¹	二 本文異同について ²³¹	三 『花鳥余情』説再考——同時代的課題の克服—— ²³³
四 「その相」の指示するもの ²³⁶	五 実隆説の彼方へ ²³⁸	六 まとめにかえて ²⁴⁰

藤壺の造型——尊子内親王の系譜との関わり……………	菅原 郁子	245
一 はじめに ²⁴⁵	二 史実の「光る」「日の宮」 ²⁴⁶	三 尊子内親王の系譜 ²⁵⁰
四 『源氏物語』における藤壺の系譜 ²⁵³	五 むすびに ²⁵⁶	

「夕霧」巻の絵画化——小野の里と鹿の情景をめぐって……………	青木 慎一	261
一 はじめに ²⁶¹	二 「夕霧」巻で絵画化される場面 ²⁶³	三 小野の里の「鹿」と夕霧の情景 ²⁶⁵
四 小野の里の絵画化——鹿の描写と詞書の有無から—— ²⁶⁸	五 まとめ ²⁷⁴	

宇治十帖の「つらし」・「心うし」……………	平林 優子	277
一 はじめに ²⁷⁷	二 「つらし」・「心うし」・「うし」における用例数と使用方法 ²⁷⁸	
三 宇治十帖の「つらし」・「心うし」・「うし」 ²⁸¹	四 おわりに ²⁸⁹	

語の表記における仮名字体の「偏り」と「揺れ」 ——米国議会図書館蔵源氏物語写本の「ケハヒ」と「カタハライタシ」の表記……………	斎藤 達哉	291
一 はじめに——表記史資料としての仮名写本—— ²⁹¹	二 仮名表記資料としての米国議会図書館蔵源氏物語写本 ²⁹³	三 議会図書館本におけるハの仮名の使用原則 ²⁹³
四 ケハヒ、カタハライタシの異体仮名組み合わせの「偏り」 ²⁹⁵	五 「揺れ」はどこに生じるのか ³⁰⁰	六 ハの表記に「揺れ」が生じる背景 ³⁰²
七 「例外」の生じる場合 ³⁰⁵	八 まとめ ³⁰⁷	

イェール大学バイネキ稀覯本・手稿図書館蔵『手鑑帖』の制作事情……………	大内 英範	309
一 はじめに ³⁰⁹	二 『手鑑帖』について、およびイェール大の日本コレクションのこと ³¹⁰	
三 見返しの絵について ³¹¹	四 配列と極め札について ³¹²	五 剥がし、貼りかえについて ³²⁰
六 まとめ——本手鑑の制作事情 ³²⁴		

丸条植通『和歌伝受書稿』について……………	杉本まゆ子	327
一 はじめに ³²⁷	二 書誌および翻刻 ³²⁸	三 内容の確認(前半) ³³⁰
四 内容の確認(後半) ³³¹		
五 背景 ³³²	六 沙弥恵空百首 ³³⁴	七 おわりに ³³⁴

『紫式部日記』の叙述態度——御産の空間における物の怪の描写をめぐって……………	大津 直子	337
一 はじめに ³³⁷	二 「平らか」なる御産の内実 ³³⁸	三 物の怪を打ち負かしたのは誰か ³⁴⁰
四 描かれる彰子 ³⁴⁶	五 おわりに ³⁵⁰	

戯笑歌にみる歌掛けの技——万葉集卷十六をもとに——……………飯島 奨 353

- 一 はじめに 353 二 問題点の所在 354 三 容貌をあげつらいからかう様式——戯笑歌の場合—— 354
四 容貌をあげつらいからかう様式——紫陽県漢族の場合—— 357 五 容貌をあげつらいからかう様式——モノ
人の場合—— 361 六 三者の比較と戯笑歌の原理 365 七 おわりに 366

洞天思想の東アジアへの流伝と平安時代の漢詩文——『本朝文粹』を中心に——……………土屋 昌明 371

- 一 はじめに 371 二 洞天の特徴 372 三 洞天思想と東アジア 374
四 『本朝文粹』に見える洞天思想の典故 377 五 おわりに 382

執筆者紹介 389

初出一覧「前篇 小山利彦論稿選集」 392

あとがき——原 豊二 393 / 斎藤 達哉 395